

留学生の生活指導相談：留学生担当教員と専門教育教員の課題

倉地 曉美*

はじめに

留学生の生活指導相談をめぐる議論は、従来指導相談部門の整備や、チューター制度の確立など専ら制度論に偏りがちであった。受け入れの受け皿もないままに、多量の留学生を受け入れ、日々対応を迫られる状況（日本経済新聞社 1997）の中で、制度的な問題に対する議論を全く抜きにして留学生の生活指導の問題を語ることはできない。しかし、制度が存在していても、必ずしも適切な人材が確保されていないことや、形はあってもそれが十分に機能していないことについては、不問に付されてきた感がある。留学生政策や制度、あるいは留学生自身の抱える問題について討議している文献は枚挙に暇がない（異文化間教育学会 1991, 稲村 1982, 岩男・萩原 1977, 1987, 1988, 馬越 1993, 江渕 1990, 権藤 1991, 栖原 1996）。また、留学生受け入れに携わる教員が負っている職務の重要性（例えば留学生カウンセラーの役割, 専門教育担当者の役割, 日本語教師の役割など）について論じられた文献（倉地 1990, 1997 a, 1997 b, 佐野 1992, 鈴木・掘・井上 1995）もいくつかある。が、大学で留学生の受け入れに携わる専門教育教員と留学生教育担当教員（大学によって名称や職務内容は微妙に異なるが、ここでは日本語・日本事情を始め、留学生を対象とした特別科目を専門に担当する教員と留学生の日本語以外の予備教育や学業相談・生活指導相談に携わり、留学生の教育を専門に担当する教員を表す）の間にある相剋やコミュニケーション・ギャップが、相互の連携を困難し、それが留学生受け入れそのものに、さまざまな影響を及ぼしている点を明確にし、公の場で論じているものはほとんどない。同じ部署や部門の担当者が集まるさまざまな形の研究会や集会の内部で、立場を異にする担当者に対する要望や不満が提示され、問題提起がなされる機会が多い。しかし、そこでの議論が、立場の違いを越えた担当者を含めた開かれた場での建設的な議論に発展するまでには至っていない。

筆者は私大で8年間、留学生教育担当教員として、日本語、日本事情、異文化間カウンセリングに携わった後、国立大学に赴任し、最初の3年間は、学部と大学院で専門教育を行うかたわら、週に一度、留学生のための日本事情の授業を担当し、そこで遭遇した留学生の生活指導相談に携わるようになった。その後は専ら専門教育の場で留学生を指導している。ここでは、主として国立大学での4年半の教育実践の中で遭遇した、留学生の生活指導相談のケースを振り返りながら、日本語教育担当者を含めた留学生教育を担当する専任教員と専門教育教員の可能性と限界や、既に述べたような留学生指導相談の問題の所在を明らかにすると共に、その解決策についても討究したい。

* 広島大学大学教育研究センター学内研究員／広島大学教育学部助教授

アプローチの方法

留学生指導相談の事例を紹介する前に、筆者が、どのような方法で留学生にアプローチしてきたかを明らかにしておきたい。4年半の間、一貫して行ってきたのは、専門教育の場においても、また日本事情の場においても、留学生の受講生に対しては全員、ジャーナル（倉地 1992）の交換を義務づけ励行してきたことである。つまり、留学生とは、単に大学の教室空間において授業で接触するのみならず、ジャーナルという内的な時空を共有し、そこでの相互作用を同時平行的に進めている。留学生とのジャーナル交換の目的や方法、およびその意義については、すでにさまざまなところで論じているので、ここで改めて論じるつもりはないが、換言すれば、それは学生（この場合は留学生）と筆者の間に交わされる1対1の自由記述のノート交換である。ジャーナルは：(1)留学生の総合的な日本語運用能力、及び異文化間コミュニケーション能力を高めるためのものでもあるが、(2)同時に、留学生の生活相談・進路相談の場、あるいはストレス発散、自己表現、カタルシスの場を提供するためのものでもあり、(3)またそれ以上に、留学生と筆者の双方向的な異文化学習の場を開くためのものでもある。

通常ジャーナルでは、留学生がジャーナルの中でパートナーである筆者に、さまざまな悩みを打ち明けたり、あるいはさまざまな問題点を指摘し、それについて、双方向的なやりとりを通して、学生と共に問題解決の糸口を探っていくことが多い。ジャーナルには、そのような留学生の悩みや訴えを対話の中で解消させる機能、問題解決に向かうための方向性を見いだしたり、内的な動機づけを促す機能、留学生のさまざまな疑問や質問に対する情報提供の機能の他に、予見の機能やラポール（信頼関係）持続の機能もある。

予見の機能とは、留学生が危機的な状況に至る前に、問題状況を予見することである。留学生がジャーナルに残す、さまざまなメッセージから苦悩や心理的な葛藤を読み取ることによって、事態が深刻化する前に対処することができる。また、留学生専任教員や専任の日本語教員、あるいは留学生カウンセラーなどでない限り、留学生と接触できるのは通常、彼らが授業を受講している期間だけ（半年間）に限られてしまうが、ジャーナルの交換によって確立された信頼関係が、場合によっては2年以上の時間空間の空白を経た後も存続し、そのために授業終了後、しばらく接触が途絶え時間を経てから、留学生が心理的な問題に遭遇したような場合にも、容易に自己開示がなされ、問題状況への対応が、容易にかつ速やかに行える。ジャーナルの自己表現の機能（倉地 1992）、問題解決の機能（倉地 1992, 1995）、情報提供の機能（Kurachi 1995）、予見の機能（倉地 1997a）を例証するようなケースについては、既に他で論じているので、本稿で詳述するつもりはない。本稿では、ラポール持続機能に焦点を当て、留学生の3つの事例で直面した、留学生指導相談に関わる問題、とりわけ留学生担当教員と専門教育教員の立場の違いによって生じる対留学生との関係、指導相談の場面で生じる困難点を明らかにし、留学生指導相談における留学生担当教員と専門教育教員の可能性と限界とその課題について論じてみたい。

ここではまず始めにアジア系の教員研究生で30代半ばのCと南米の日系の院生で20代半ばのDの2例を、そしてその後に欧米系の20代半ばの日研究生Eの事例を概観し、前の2例と後の1例を対照

させることになるが、それは、前の2例(CとDのケース)はともに、筆者があくまで、彼らの日本語日本事情を担当する教師としての立場で接したのに対して、最後のEのケースは、専門教育を担当する教員という立場から接することになったという立場上の違い、関係性の違いから、全く違った状況が派生することになった経緯を明示したいと考えるからである。

留学生生活指導相談の三つの事例

事例1：留学生教育の場での関わった教員研修生のCの場合

アジア系の教員研究生Cの場合、日本来日直後から最初の半年間の間、ジャーナルを交換しているときから、すでに、初めての一人暮らしや、単調な遠隔地での生活など留学生活に対する不満やストレスが鬱積し、心身の不調を訴えていた。その後、指導教員の下で研修を受けるようになってからも、ますますストレスが高じ、胃腸の症状や体の痛み、めまいやだるさ、不眠を訴えるようになり、筆者のところに電話で苦痛を訴えて来た。たまたまCの下宿と所属学部が筆者の自宅の近くにあったため、週一度、自宅でカウンセリングを行うことになった。1カ月経たないぐらいから、身体症状はどんどん軽減していった。受け身で毎日不満を述べるだけではなく、与えられた留学生という立場や時間をフルに生かし、自分で自分の生活設計をしながら生きることの大切さに気がついたCは、自発的に院生に韓国語を教えたり、韓国人被爆者の通訳ボランティアなども積極的に行うようになり、すっかり元気を取り戻した。筆者はCが夏休み中は旅行をすると聞いていたし、Cの所属学部での自立的な生活や、新しい人間関係の形成を促進することの重要性と、Cの筆者への依存的な関係に歯止めをかける必要があると判断し、しばらく自分の方から連絡をとらずにいた。

しかし、その間に、それまで自由度が高かった指導教員の指導方針が突然変更し、Cはレポート作成のために夏休みも返上で、ほとんど毎日、研究室に日参しなければならない状況に陥っていた。その後もチューターとの関係の悪化など、研究室内での対人関係でストレスが高じ、結局筆者が次に会った時のCは、完全に来日直後から6カ月間の頃と同じような身体の不調を訴え、抑鬱状態に陥ってしまっていた。夏以降、胃腸の症状や体の痛みやだるさ、食欲低下、睡眠障害が続き、秋に病院で精密検査を受けたが、異常なしと診断された。寒くなって風邪をひいたのが契機となり、Cは周りとの関係をほとんど遮断し、引きこもり症候群に陥っていた。風邪は、一カ月以上たっても症状が収まらず、「日本にいる限り、自分はどうしても体の不調からはまぬがれないのだ」と堅く信じて、帰国の日を指折り数えながら、心を閉ざしていた。筆者は、風邪が直ったら、少し気分転換に暖かいところでも出掛けてみてはと、最初の落ち込みの時に効を奏した転地療法を強く勧めてみたが、日本での体調の回復については完全に諦めていて、「外貨をむだ使いしては韓国のためにならないし、もうすぐに帰国するのだからこのままの状態で我慢する」と言って、頑なに拒んだ。阪神大震災のときには、夜中に電話で、「日本人は神戸で在日韓国人を差別して救援物資を与えていないと聞いたが、先生はそれをどう思うか」と撒を飛ばしてきたこともあった。Cにとって、最も日常的な接触が多い研究室の中に、誰も支援するような対象、心を開いて話ができるような対象がなかったことが、(院生のチューターはいたが、学業に忙しく、チューターとの関係は険悪であった。)

致命的で、来日当初にはなかったような日本社会、日本人に対するネガティブな印象が形成されてしまっていた。体調が悪く、ふらふらするといつてほとんど外へ出なくなったのと電話を処分してしまったために、コンタクトは、Cの下宿に向向いていかなければ、とれない状態になったが、帰国まで何度かやりとりを続けているうちに、徐々にとげとげしい気持ちも和らぎ、自分の留学の体験を振り返って、「この留学で初めて自分の欠点や弱さを見つけることもできた」という言葉をおいて帰国していった。

事例2：留学生教育の場での関わったことがある大学院生Dの場合

南米日系人大学院生の20歳半ばのDも、日本事情の授業で、ジャーナルを交換し、ラポールを形成した学生である。その当時Dは、研修生という身分であったが、来日3年目に、他学部の修士課程に進学するに至った。大学院に進学するまでの2年間は、留学生の授業での関係が切れてからも、進路相談のことなどで、よく筆者の研究室にたずねて来ることがあったが、大学院に進学してからは物理的にも遠くなり、学業に追われ始めた様子で、めったに連絡をしてくることもなくなった。

ところが、Dが修士課程2年目になった春、偶然バスで、生気を失い、別人のように変わり果てた表情のDと乗り合わせた。とりあえず、すぐに時間をとって話をすると、涙をこぼしながら、ひどく疲れた感じで、「何をやる気にもならず、起き上がることも、皿一枚を持つことさえ億劫に感じられるようになってしまった」と訴え始めた。筆者の知るDはいつも明るく前向きで、日系の外国人労働者へのボランティア活動に率先して取り組むエネルギッシュな学生だったが、そこで見たDは、抑鬱症状が強く、活力が失せ、消沈しきっているにもかかわらず、大学院のさまざまな課題や回りの期待の重圧だけを満身に感じ、焦りと、何もできない自分自身にフラストレーションを感じ苦しんでいる様子を露に示した。幸いDの家族が、首都圏に住んでいることを知っていたので、何をおいても親元に行き、しばらく休養するよう説得を重ね、同時に信頼できる東京の精神科医に連絡を取り、Dを紹介することにした。専門医によるカウンセリングと投薬治療が功を奏し、半年後、すっかり回復し、大学院に復帰することができた。

C、Dいずれの場合も、ジャーナル交換終了後に、問題状況が発生したケースである。Cの場合は、身体的な症状を十分に改善するまでの時間がなく、体調不良のまま帰国することになってしまったが、Dの場合は、転地療法をするのに十分な時間や家族の支援など、様々な条件が整っていたため完治に至った。しかし、どちらのケースも、留学生を担当する教員として、ジャーナルで確立したラポールが、一定の時間空間の空白を経た後も風化せず、存続していたがために、留学生の筆者に対する自己開示が円滑に行われ、問題発見時からの対応が、敏速に行えた事例だといえる。CとDの二つのケースはともに、留学生が、専門課程で精神的なサポートをするような対象に巡り会えず、一人で悩みを抱え込み、自分自身を追い込み、閉塞状態に陥ってしまったケースである。

筆者は、長く日本語教育や留学生カウンセリングなどに携わり、いわゆる留学生教育担当の立場から、同じようなケースに度々遭遇し、専門教育での専門教育担当者の留学生に対する対応についても、非常にはがゆいものを感じ続けてきた。しかし、立場を代えて専門教育の場に立ってみると、

専門教育を担当する教員が留学生の指導相談にあたる、あるいはケアをするということが、いかに難しいかを痛感したのが、次に紹介するEの事例である。

事例3：専門教育の場での関わった日本語・日本文化研修生Eの場合

欧米系の日研究生で20代半ばのEは、50人ぐらいの学部生が受講する筆者の専門の授業を半期間聴講したことがあった。その授業には、他にも7、8名の留学生が受講しており、Eはその一人であった。留学生の受講生に関しては、正規生も聴講生も関係なく、全員にジャーナルの交換を義務づけていたため、筆者は半年間、Eとジャーナルを交換した。Eは非常に明るく、協調性があり、社交的で、誰に対しても親切であった。留学生であれ、日本人学生でありEを知らない者はいないという程であった。勉強に対しても、ジャーナルに対しても非常に意欲的に取り組んでいる姿勢がはっきり認められた。Eの来日は3度目で、高校のときにホームステイで1年来たことがあり、その後JETプログラムで英語を教えに来たときに、2年間関東で暮らしたこともある。日本語は高校から勉強しているだけあって、会話は流暢であった。Eは、ひかえめで、落ち着いた感じのする柔和で「日本的な優等生」タイプの留学生で、大学院受験を目指して、勉強に励んでいる大変まじめで熱心な学生として、教員にも学生にも、評判がよかった。ジャーナルではさまざまな話題について話し合ったが、「私は馬鹿で、日本語ができないからもっと勉強しなければなりません。頑張ります。」が口癖で、セルフ・イメージの低さが顕著に認められた。この授業と同時にジャーナルの交換が終了したのが2月であった。ジャーナル終了時に「これで終わるのが残念でならない」と申し出てきたので、「引き続き交換してもよい」と返事をした。しかし、すぐにまた、「やっぱり続けられません」と言って来たので、交換を終了した。そのころから、しばらく大学でEの姿を見かけなくなったが、2月には他学科の大学院入試を受けるかもしれないという話も聞いていたので、恐らく受験に備えて忙しいのだろうと考えていた。

そのEの様子が、誰の目にもおかしくうつようになったのは、4月の新学期のことであった。Eは、筆者が4月から開講した別の80人ぐらい学部生が受講する専門の授業に顔を出していたが、一目で、表情が暗く沈んだ感じになってしまっ、目が落ち込み、すっかり憔悴しているという印象を受けた。それまでならば、Eは一番最後まで教室に残り、筆者と必ず言葉を交わしてから笑顔で部屋を出て行ったのに、その日は授業が終わると、力なく「頑張りますから」と言う言葉だけ残して、引き留める間もなく、そそくさと一人で教室から出ていった。その様子が、気がかりだったので、早速Eと比較的親しくしていた学部生に、最近の様子を尋ねてみたところ、「最近、みんなEの様子が変だといってますよ」と言った。その直後、別の学生が筆者のところに来て、昨日学校の帰り際にEと会った。するとEは突然その学生に、「先生(筆者)のところ相談に行きたいが、先生は忙しそうだからだめだろうか。私が相談に行くと先生は迷惑でしょうか」と聞いてきたという。その日本人学生は、前からときどき悩みの相談で筆者の研究室を訪ねていた学生であったが、Eとは親しくなかったのに、突然Eが筆者のところ相談に行くことについての助言を求めてきたので驚いたが、「先生は喜んで時間をとってくれるから心配しないで会った方がいいよ」と言ったら、Eは安心したように「じゃあ一度会ってみます」といって別れたという。しかしその学生は

Eの様子に不穏なものを感じたので、「一度Eさんと会ってあげて下さい」と告げに来たのである。筆者はEの指導教員という立場でもないし、一つの授業の聴講を許可していたというだけの関係だったが、幸い、専門の授業で前にジャーナルを交換していたこともあるので、早速こちらから連絡を取ってみることにした。

Eは電話を引いていなかったもので、なかなか連絡がつかなかったが、E-mailでやっと連絡がとれ、早速会うことになった。「ちょうど月曜に一時帰国をすることにしたので、明日どうしても必要書類を出しに役所にでかけて行く」ということだったので、金曜日の昼過ぎ、もよりの駅で待ち合わせをした。待ち合わせ場所に行くと、二人の同郷の留學生が付き添っていた。二人の留學生とは面識がなかった。「一緒に」とお茶を誘ってみたが、二人は別の約束があるからと、立ち去り、筆者とEの二人だけになった。もよりの喫茶店に入り、話を始めたが、Eは、ひどい抑鬱症状であった。体は強く硬直していて、身振も緩慢になり、うつむき加減で、表情はじっと一点を見据えたままであった。こちらが何を言っても、全く耳に入らないといった状態で、「ごめんなさい、私は失敗した。先生にご迷惑をおかけしました。私は悪い人間です」という4つぐらいの言葉を低いつぶやくような小さい声で繰り返し、時折自責感、自己無価値観を露にして涙を流すが、体力も気力もすっかり萎えてしまっているという状態であった。その日が、金曜日の午後で、「月曜日に一時帰国を決めた」というのに、出発がどこの空港なのか、いつのどのフライトで出発するのか何を聞いても、全く要領をえなかった。今は一刻も早く帰国して専門的な治療を受ける必要があると思えたが、ここで、Eと別れて彼女を一人にできるような状態ではないことが明白だったので、とにかく一緒に電車に乗って宿舎まで連れて帰ることにした。電車に乗っている間にもEは、「一度帰国したら2度と戻って来られなくなるから、お世話になった先生方におわびをするまで帰国できない」という考えにとりつかれ「今日は金曜日で先生方にはもう会えないから、月曜日の出発は延期する」と繰り返し始めた。これ以上帰国を引き伸ばすべきではないと判断されたので、彼女の気が済むように、宿舎に帰るまえに、指導教員や世話になったという教員の研究室まで連れていくことにした。しかし、部屋の前までくると、Eはそこで立ち尽くすだけでノックすることもできなかった。そこで代わりにノックをし、「Eさんが一時帰国をするので、ご挨拶に参りました」と言ったが、どの教官も事情が十分にわかっておられず、Eの突然の一時帰国の報に驚いて、「諦めて帰るのですか」「もうすこしががんばってみた方がいいんじゃないでしょうか」などと言われる。すると、Eはますます落ち込んで声も出なくなり、蚊のなくような声で「先生、ごめんなさい。私はご迷惑おかけしました。」と繰り返し、最後に、棒のように立ち尽くして、歩くのも背中を押してやらないとままならないような状態に陥っていった。彼女が一人の教員の部屋の中で、教官と向き合っ、何もできずに、小一時間重いバックパックを両手に抱えたまま体を硬直させ、じっとうつむき加減に立ち尽くしている間に、至急近辺の精神科医に連絡をとり、すぐに約束をとりつけることにした。もはや通常のカウンセリングなどでは、とても対応できるような状況ではなく、医学的な処置が必要であると判断されたからである。「お医者さんにいって、話を聞いて戴いたら、苦しいのが楽になるかもしれない」といって、Eはその言葉に光明を見いだしたらしく、精神科医にかかることには全く抵抗を示さず、むしろ専門教員たちへの挨拶をすませ、診療所にいく間には、幾分か棒のように硬直した堅さが少

しずつほぐれていくように見えた。

しかし開業医の第一声は「Eさん、あなたには前にも会ったことがありますね。」であった。Eがこれまでに精神科医にかかっていた事実を知らなかった筆者はこの言葉に当惑したが、前に他で診察を受けた医師に、もう一度別の場所で遭遇するとは予想だにしていなかったEも、大きなショックを受けた様子で、また体が硬直し、全く押し黙ったままの状態に入ってしまった。医師によれば、2月の大学院受験の前後に、Eは一度カウンセリングを受けに大学の医療センターに出向いたことがあるらしかった。たまたまこの医師が、大学での診察日に当たっていたため、そこでEを診察することになったのだと言う。

Eは、その後の医師の「どうしましたか」という問いに、終始無言のままであった。あまりにも長く、重苦しい沈黙の時間が流れるので、筆者は医師に、「席をはずした方がよろしいですか」と申し出たが、「同席して下さい」と言われた。しばらくどちらかの言葉を待ったが、どちらも押し黙ったままで、大変気まずい空気が流れる。そこで「差し支えなければ代わりに説明させて戴いてよろしいですか」と断り、筆者はEとの関係、その日、Eに会うことになった経緯と、その日ずっとEを身近に観察していて気がついたこと、1月以来の変化、Eが月曜日のフライトで一時帰国することになっていることを伝えた。すると医師は突然「鬱病の恐れがありますね。自殺をするかもしれませんから、気をつけて下さい」「あなたには前に会ったときも、一度帰国したらと勧めたでしょう。とにかく今は一刻も早く国に帰って、向こうの精神科の専門医にかかって治療を受けて下さい。」と言い、食欲と睡眠はちゃんととれているかどうか聞いた。Eは相変わらず、石のようにこわばって堅くなり、何も答えなかったので、代わりに、本人から話を聞いた限りでは、食欲は低下しているようだが、睡眠については問題がないと言っていたことを伝えると、「薬を出しておきましょう。」と返ってきた。どんな薬を出してもらえるのか訊ねたところ、「マイナー・トランキライザーです」と言われた。できればもう少し強い薬を投与して戴けないかと頼んでみたが、本人はもうすぐ帰国することだし、帰国して経過観察ができなくなってしまう患者に強い薬は、処方できないと断られた。そこで、とりあえず、帰国して次の医師にかかったときに、すぐに分かるように、処方してもらう薬の名前と分量を医師に書いてもらい、その処方箋を、Eのかばんの中に収めさせようとしたが、Eは動作が緩慢になり、それだけのことをするのに、ひどく手間取った。診察所を出て、寮まで連れ帰ったが、寮の部屋の前で、どこかにカギを落としたことに気が付き、Eはおろおろし始めた。幸い、カギは、同じ寮の留学生在がひろってくれていたので部屋に入ることはできたが、室内は予想通りひどくとり散らかっていた。本は床に散らばり、衣類がベッドの上に散乱している状態であった。夕食の時間になり、食後に薬を服用しなければならぬので、帰り道で買った軽食を勧めてみたが、飲み物に少し口をつけただけで、固形物はいくら勧めても「先生、食べて下さい」というばかりで、自分はほとんど食べようとしなかった。「一緒に食べるから」といって、なだめすかして一口パンを口に運ぶだけでも大変な時間を要した。自室に戻ってからのEは再び、「先生にご迷惑をかけた。ごめんなさい。先生に悪いことをした。私は最低の人間、失敗した。」と呪文のようにぶつぶつ繰り返すばかりで、Eの筆者に対する気兼ね、気遣いが痛々しいほど伝わってきた。

筆者はEがなぜこのような状況に陥ったのか、知りたかったし、月曜日のフライトが実際どうなっ

ているのかを確かめ、Eが月曜日のフライトで帰国するまで何とか責任を持って、ケアできる体制を組まなければならないと考えた。金曜の夕方には、Eの宿舎にはケアを任せられるような職員は誰もいないし、その状況では、筆者がこの事態に対処せざるを得なかった。このような状況でEに対してできる最良のことは、Eが気がねなく、リラックスできるような、しっかりした友達に付き添ってもらふことであると考えられたし、Eの親しい友達からここに至るまでの詳しい話を聞き出す必要があるとも思われた。そこで、Eに「親しい友達是谁なのか」と聞いてみたが、「皆が私を嫌っている。私は悪い人間で、皆に迷惑をかけたから、誰も私を友達とは思っていない。私は人間関係に失敗した」と言うばかりで、話にもならなかった。そこで、駅で会った二人の同郷の留学生に話を聞こうと、Eに連絡先を聞いたが、「二人は久しぶりに街に出たから、帰りは深夜になるにちがいない」という事であった。

幸い、筆者が以前に、ずっとジャーナルを交換していて、学習援助者を育成する目的で学生を中心に組織しているサポート・ネットワーク（倉地 1996）にも入って活動していた、アジア系留学生のYが、前にこの宿舎の欧米系の留学生と積極的に交流していたことを思い出し、「Yさんのことを知っているか」とEに聞いて見たところ、Eは、「Yさんならよく知っている」と云うので、さっそくYを呼び出した。Yは大学院博士課程の最終学年に在籍していて、博士論文の仕上げに忙しく、筆者ともしばらく会っていなかった。Yは、Eとは、ほんの顔見知り程度だったのだが、わずかな間のEの変貌ぶりに驚き、筆者がなぜEの部屋にいるのか、またどうして筆者がYをEの部屋に呼び出したのか、無言のうちに、すべてを察知した様子であった。話を聞いてみると、Yは、駅で会った二人の欧米系の留学生A、Bとはいつも同じ宗教団体の礼拝に通っている仲間で親しく、この2人を通してEを紹介されたということも、AとBはこの宿舎に住んでいて、その日はもう部屋に戻ってきていることもわかった。Yによれば、Eのことを最もよく理解しているのは、同郷のA、Bと、Yの宿舎にいる欧米系の留学生Xの計3人であった。筆者は、その他にもう一人、Eと同じ学科の留学生で、比較的Eと親しくしていてEの状態を察知しているらしいアジア系の学部生ZもEの部屋に呼ぶことにした。そして、その日は、筆者がEの部屋に泊まるからということだけをEに告げ、学部生のZにしばらくEを看させておいて、Yと共に、早速、同郷の二人の留学生A、Bの部屋を尋ね、彼らからこれまでの話を聞き、一緒に今後の対策を立てることにした。A、Bは筆者が突然、彼らの部屋を訪ねて来たので、困ったような緊張したような表情を示したが、一緒について来たYが「先生と私は、ずっと昔からの知り合いで、何でも話せる関係だから、二人はEのことで、何でも知っていることを先生に話して」といったので、A、Bは打ち解けて、いろいろな話をし始めた。

春休みの間、AもBもXもZも、周りの友達が、みんな旅行をしてキャンパスを出払うので、一緒に行こうと誘ったが、Eは誰の誘いにも応じず、「自分は勉強しなければならない」と言い張って一人がんとして、宿舎に留まった。しかし実際に誰もいなくなってしまうと、孤独感、孤立感が募り、それが、ついには大学での人間関係に失敗したという妄想につながってしまったらしい。また進学についても、「前から自信はないし、自分でもこれといった目標がない」と悩みながら、大学院を受験しようと考えていた背景には、厳格な父親とできすぎる弟の板挟みになり、いつも劣等感に悩んでいたEの深層に、父親の承認を得たいという強い欲求があったらしいこともわかってきた。

その上、Eは大学院に入るためには専門教育教員たちの機嫌を損ねてはいけない、彼らの手を絶対に煩わせてはいけないという強い固定観念に囚われていることもわかった。

ちょうどその前日も、Eは突然、「先生方の研究室に最後の挨拶に行く」と行って、筆者ともう一人の教員の研究室の前まで来たが、どちらの部屋の前でも、ノックもしないでじっと立ち尽くしたままにいたという。一緒についてきたAとBが、「ノックをして、先生の都合を聞いてあげようか」と言っても、Eは「邪魔をしたくないから」とそれを強く制止し、30分ほど棒のように立ち尽くしたまま、ゼミの授業が終わるのを待っていたが、いつまでたっても終わりそうもない。3人は一度宿舎に帰ってから、もう一度、出直したが、その時には、既に研究室にはひとけがなく、電気が消えていた。それを見たEは悲嘆にくれて、「私は先生に嫌われている。私が馬鹿だから、先生に見放されてしまった。先生は私を笑って、軽蔑している」とひどく落ち込んで帰ったのだという。また別の留学生の話によれば、数日程前に皆で、Eの気持ちを紛らわせてあげようとレンタルビデオを、一緒に見ていた。それは、『サウンド・オブ・ミュージック』のビデオだったのだが、突然Eが、映画の登場人物を見ながら、「これはF先生だ」、「G先生もここにいる」と、専門教育の教員の名前を順番に一人一人挙げ始め、「私の学科の専門の先生が皆この映画に出演している。どうしよう。」と興奮し、ひどく取り乱したため、皆、びっくりしてしまったという。筆者は話を聞いた後、A、Bに「面識がなかったからとはいえ、いつもEからいろいろな話を聞いていたのならば、どうして、Eのことで、直接連絡をとってくれなかったのか」と聞いたが、なにしろEは、専門教員に対していつも戦々恐々としていた。日本に来日したばかりで、日本の大学の様子がよく分からないA、Bは、Eが考えるとおりなのだろうと考え、相談するのは遠慮していたということであった。

たまたまAの母親がカウンセラーなので、Aは国際電話で母親にEの様子を逐一報告し、どうしたらよいのか相談したところ、Aの母親が「一刻も早く、帰国させた方がいい」と助言したので、AはBと二人で、Eを説得し、一時帰国を決めさせたということであった。何しろEはこの1週間ばかり、気分の浮き沈みが激しく、ものを落としたり、忘れてたり、自分で自分のことがろくにできないような状態だったので、ずっとAとBが付き添って、今回の帰国に関しても一切の手続きをしてあげたのだという。Eは、身繕いはもちろんのこと、身の回りのことさえほとんどできなくなっていた。そのうえこのところずっと不眠が続き、「眠れない」と真夜中にAやBに訴えてくるし、彼らがうるさく言って、食べさせないと食事も一人でとれない状態に陥ってしまっていると言う。筆者は、医師に言われたことを彼らに告げ、Eが一番気を使わなくて済むような誰かが、空港まで確実に送り届ける必要があること、出発までは目を離せない状況なのでここで24時間のケアの体制を組むことが必要であることを彼らに伝えたところ、友達であるA、BはもちろんYも、A、Bからの連絡でその話を聞いたXも、Eのためならどんなことでもしたいと申し出た。早速、月曜日までの役割分担を決め、時間のやりくりをしている最中に、学部生のZがあわてた様子でEの部屋から電話をかけてきた。ちょっと目を離しているすきにEが薬を食べ始めたという。落ち着いて、いくつ食べたのかを確認させたところ、3錠減っているということであったので、その程度なら大丈夫だから、安心するよう伝え、「これ以上勝手に食べるようなことがあっては、いけないから、薬を取り上げて、こちらで管理し、これからは必要なときに一錠ずつ渡して、飲ませるよう、徹底しよう」

とこれからEのケアを手伝ってくれる他の留学生にも同じ指示を与えて、早速Eの部屋に戻ってみた。

Eは少し興奮した様子で目を泣き腫らしていたが、それほど変わった様子は見られなかった。側についていた留学生のZに、何がおきたのか詳しく事情を聞いた。筆者とYが部屋を出てから、Zは、机の上に置いたままになっている食べ物をEに勧めてみたが、Eは「それは先生が買ってくれたもので、自分が食べるのは申し訳ないから食べない。先生には病院の支払いもさせてしまった。私は先生に迷惑ばかりかけている」「私は本当は正常なのだけれど、先生の注意を引きたいから、こんな演技をわざとやって先生を困らせているだけ。私は正常なのだから、国には帰る必要がない」などと言って、食べ物には決して口をつけようとしなかった。しばらくすると今度は「今夜、先生が私の汚い狭い部屋に泊まるのは申し訳ない。自分をもっと落ち着いて、ちゃんとしなければ先生にますます迷惑をかけてしまう。先生に嫌われたらどうしよう。こんな私だったら絶対に先生に嫌われる。先生に嫌われたら自分はおしまい。しっかりしなければ。」と興奮状態になり、何かむしゃむしゃ食べ始めたと思ったら、それが、薬だったので驚いたと説明した。

筆者はZの報告や、それまでに同郷のA、Bから聞いたさまざまな話、Eの専門教官との対応の中で観察したさまざまな事柄を総合し、Eの筆者を含めた専門教員に対する対応と、友達に対する対応には、大きな隔たりがあることに気がついた。そして、Eにとっては、いつも彼女を評価する教師でしかない立場にある筆者が、むやみにEに接近することは、精神的な負荷をかけることになり、病状を悪化させるだけなのではないかということに初めて思い当たった。幸い、Yは筆者がもっとも信頼できる院生の一人であったし、これまでのEに対する対応の説明を聞いて、他の留学生たちも大変しっかりしていて、冷静に事態に対処できる能力を十分に備えた学生であると判断されたので、急遽、その晩はEと親しいXに付き添いの役を依頼し、月曜日の出発までのEへの表向きの対応をこの留学生たちに任せる方針に切り替えた。ただし、何もかも留学生に任せてしまうのではなく、出発まで、Yを筆者と他の留学生の間の連絡係にし、2、3時間毎に互いに電話で連絡を取り合い、筆者はその場、その場で出てくる様々な事態に対する具体的な指示を与えていくことにした。そして当面、学生達がEのケアをしていく上で気をつけなければならない注意事項を明示する一方、Eの指導教員に連絡をとり、一部始終を報告した。その夜は、余分に服用した精神安定剤の副作用が万が一あれば、特別の対応が必要になるかもしれないことを想定し、筆者は学生宿舎の空き部屋で待機することにした。

月曜日の出発までには、帰国を目前にし、Eの心が動揺し、感情の起伏が激しくなる一方で、親からの電話があったり、この種の問題を抱えた学生への対応に慣れない見舞い客の応対や、飛行機搭乗前にパーサーのチェックをパスしなければ搭乗できなくなるかもしれない事態になりかけるなど、様々な問題に直面したが、筆者とYと他の留学生とEの家族の連絡網と、筆者と指導教員とEの家族と航空会社の連絡網が有機的に機能したことと、医者の方で処方した精神安定剤が有効に働いたことに加えて、直接的な対応に当たった留学生仲間の連携が功を奏し、Eは無事帰国するに至った。帰国後Eは、直ちに現地の精神科にかかったが、このケースの場合、特に治療に家庭の協力が不可欠であると思われたので、指導教員から家庭に直接連絡をとってもらおうよう依頼すると共に、筆者

自身もEの両親に、Eの留学先での状況とその背後にあると思われる背景について理解を得るために数回手紙のやりとりをした。その後、Eは鬱状態から回復し、地元の学校で仕事をするまでに回復している。

考 察

Eのケースに限らず、留学生担当の教員と専門教育教員とでは、その立場の違いによって留学生の教師に対する見方、考え方が非常に大きく異なってくる。例えば、専門の授業で、ジャーナルを交換している留学生たちは、「ジャーナルには、いつもきちんときれいな日本語で書かねばならないため苦痛だ」と一般学生に訴えている。何を書いても、どんな間違いをしても評価の対象にはしないということを事前に強調した上で実施しても、専門の授業でジャーナルを交換する留学生は、それを額面どおりに受け止めず深刻にとらえてしまうが、留学生の授業でジャーナルを行う留学生は、のびのびと自由な自己表現をし、先のような苦情は聞かれない。

大学院進学や学位習得を目的に勉強している留学生にとって、専門の授業で指導を受ける教師の前では、いつも模範的な学生を演じなければならないという気持ちが自然に強く働くため、教師側から努めて、学生と対等なレベルで関わろうとしても、なかなかそれが実を結ばないばかりか、最悪の場合はEのケースのように、専門教員が留学生に個人的に関わろうとすればするほど、逆に学生の精神的な負荷が増大するという状況も生じ得る。それに対して、留学生センターの担当教員や、日本語の授業を担当する教員という立場は、留学生に対して直接、生殺与奪の権を行使できるわけではないので、(但し一部私大では、一部の留学生担当の教職員が、私費留学の奨学生の選考等に深く関与するため、全く逆の現象が生じることもある)留学生にとってもことさら構えたり、警戒心を抱くことなく、心を開きやすい存在となる。緊急の事態においても、後者の方が、はるかに危機介入しやすい立場にあるのである。このように、留学生の専門教育担当者への過度の遠慮や気遣いの原因の一つは、留学生にとって最も重要な専門領域での評価を直接下す側と評価を受ける側との関係性の中に内包される力学から必然的に生じるものと考えられる。しかし同時にまた、彼らが極度に専門教育担当者に畏怖の念を抱くのは、オリエンテーションや予備教育段階でなされる、過度の適応教育(同化教育)にも拠るところが大きいのではあるまいか。予備教育やオリエンテーションに携わる側の、専門教育担当者一般に対するネガティブな固定観念が予備教育の中に反映し、「専門課程にいけば、教員は皆こうだから」とステレオタイプな専門教育担当者像が、留学生の中に植え付けられてしまう。(無論すべての専門教育担当者が、異文化的状況におかれた学生の対応に慣れている訳ではない。そのため、留学生に対する個人的な対応を避けたり、それを留学生担当教員等に一任する教員もあろうが、そのような傾向は後述するように、専門教員に限ったことではなく、日本語教師の中にも、留学生教育担当者の中にも同様に見いだせる。)そのことによって、専門教育の教員が、いくらその殻を破ろうとしても、留学生側の根強い先入観の枠を取り払うことができず、その結果、十全な対応ができないという事態が生じることも、見逃せない。また大学が受け入れ留学生の機関保証¹⁾を行うのではなく、専門教育に携わる個々の教員が、留学生の指導教授になると同

時に、身元保証人をも引き受けざるを得ないといった制度を敷くことによって、それがかえって留学生と指導教員との関係の円滑化を困難にするような足かせとなっていることについても、大いに熟考されるべきである。

専門教員としての立場から生まれる留学生指導の限界という観点から考えれば、専門分野の指導を必要とする正規の大学院生の場合はやむを得ないとしても（むろん大学院生の場合も必ずしも留学生の専門分野と、受け入れる指導教授の専門分野が合致しているとは限らず、留学生の配属先の割り振りに関しても、まだまだ改善されなければならない課題が山積していることは否めないが）、国費の短期留学生の指導を、専門教育担当者に割り振ることや、指導教授が身元保証人を兼ねなければならないことについての妥当性については、大いに検討の余地がある。

冒頭に述べたように、留学生の生活指導相談においては、ともすれば、受け入れ体制／支援体制をより一層拡充ないしは、徹底したものにすべきであるという制度論のみが先行しがちである。しかし、体制はあっても、それぞれの機関に固有の問題や様々な事情があつて、それが完全に機能していないことが多々あるという現実もまた打ち消しがたい。それに、異文化の壁に閉ざされた留学生の緊急の事態に日々対応していかなければならない状況下で、ただ制度論を論じるだけでは、そこから何の解決策も引き出し得ないことは明白である。

Eのケースのような場合、医者との連携さえあれば事足りるわけではなく、本来は、留学生センターの教員やあるいは日本語の授業を担当する教員で留学生のことをよく知っている、そして留学生の方でも安心して心が開けるような教員が専門教育担当者や医者との間で密に連絡をとり、互いが情報交換を図りながら、連携プレイを行うことが望ましい。しかし、Eに関して言えば、日本語の授業をいくつか取っていたけれども、日本語の担当教員は授業以上の関わりを留学生に求めていなかったため、Eと日本語担当教員の間には相当の心理的な距離があつたし、またEは留学生担当のカウンセラーの所にも相談にいったが、その対応に問題があつたと言うことで、Eと周りの留学生の中に強い不信感が募っていたため、部署を越えた担当者間の連携は不可能な状況であつた。したがって、専門教育担当者だけで、このような事態に対処するためには、(1)学習援助者として、この種の、「異文化の壁に行き暮れた人々」に接するための多少の経験や知識を持った学生（この場合は留学生）を核にして、支援体制を組織すること。(2)直接的な対応を信頼できる学生に任せながらも、彼らとの間で密に連絡を取りつつ、教員側は出来る限り当事者の目に立たないようにして、学生たちの支援活動を側面から、全力でバックアップしていくしかなかったのである。

大学においては、専門教育担当者であれ、留学生担当教員であれ、一般学生であれ、留学生であれ、「異文化の壁に行き暮れた人々」に臆せずに対応できる能力（学習援助者能力）と経験を備えた個を育成することこそが、留学生教育の次元を越えた、多文化共生時代の大学教育全体に課せられた大きな課題であるに違いない。特に、留学生教育を担当する教員には、専門教育教員よりも、留学生への生活指導相談が行いやすい立場にあるという利点があり、専門教育担当者には、留学生担当教員より一般学生との接触の機会が多く、長期的に一般学生の学習援助者能力の育成に取り組むことがしやすい立場にある。それぞれの役割上、立場上の利点を有効に活用しつつ、人材育成の方途を探ることも重要である。例えば、専門教育担当者の立場からできること、なすべきこととして、

一般学生の、異文化学習に対する問題意識を高め、サポート・ネットワークを組織し、日々の教育実践の中で、長期的な展望を持って、異文化との相互作用に必要なさまざまな能力や資質を身につけさせ、異文化学習の意味を発見することができる方法を、彼らと共に探っていかなければなるまい(倉地 近刊)。Eのケースで行ったように、留学生の生活指導相談を円滑に行うためには、教員同士のみならず、学生と教員、一般学生と留学生などにも協力を要請し合いながら、ありうべき方向性を探っていくことも重要である。そのためには、制度論と平行して、留学生受け入れに関わって、各々違った役割を遂行すべく任を負った担当者(大学教員)同士が、それぞれに何ができて、何ができないのか、それはなぜなのかを十分に理解し合い、役割を相互補完するために何をなすべきかという議論を行うことが不可欠である。

学生の活用ということに関して言えば、昨今、一般学生や留学生が組織する国際交流ボランティア・サークルに資金援助を行い、その代償に、留学生センターや会館直属のような機能を果たさせ、そこが主催する行事や活動の手助けをさせるといったことが、あちこちの大学で盛んに行われるようになってきている。こうした活動は一見、学生と大学側(留学生担当者)が協力体制を組み、新しく来た留学生の受け入れにあたることによって、そこに理想的な協同作業が具現化されているかのごとくに映る。しかしその陰で、サークルの活動資金や留学生奨学金などを得る代わりに、大学側の命令一下、手足となって動かなければならず、学生の自由で自主的な、サークル本来の交流活動ができなくなってしまったといった不満が学生側に鬱積していることは、看過されている。むしろ学生や地域の協力を得なければ、限られた専任スタッフだけで、留学生受け入れに関するさまざまな活動を遂行することは容易ではないし、学生の協力を求め、その力を活用することも重要である。しかし、学生の自治的な活動組織を、直属の下部組織であるかのように利用し、業務の軽減を図ることは合理的な措置ではあっても、それが教育的に望ましい在り方なのかどうかについては、大いに疑問が残る。留学生受け入れに、一般学生の力を必要とするのであれば、留学生担当者は上記のような彌縫策を講じるよりもまず、国際交流に必要な人材の育成を学内の専門教育担当者にもっと強く要請し、そのために必要な協力関係を作り出すことが先決である。

97年国立大学日本語教育研究協議会の留学生生活指導相談部会においては、留学生センターで留学生指導相談に当たっている複数名の専任教員から、「日本語教官や専門教育教官はなぜに個々の留学生の相談や対応を回避しているのか」という不満や疑問が提示された。しかし同時に生活指導部門の教官からも「回避しているのは、日本語教官や専門教育教官だけではない。センターの教官や留学生専門担当教官の中にも、個々の留学生の生活指導相談には全く無関心で、専ら自らの業績作りにばかり専念している同僚も少なくない」という意見が提示された。留学生を受け入れる部署はあっても、現実問題として個々の留学生に正面から向き合える/向き合おうとする人材が、依然として非常に不足しているというのが日本の大学の留学生受け入れ体制の抱える古くて新しい問題である。大学や行政が、そのような事態を黙認し、現状維持に留まる限り、この国の留学生受け入れに、改善の兆しを見いだすことは難しい。

問題の解決の第一は、オーバードクター救済の措置として、若手の留学生教育担当者の人選を行うという現行の留学生担当者の人事の在り方(すべての人事がそうであるとは限らないが)、審査資

格や基準を抜本的に見直し、大幅な修正を加えるべきである。とりわけ近接領域での研究業績が必ずしも、その個人の留学生指導相談の力量や適性や意欲を表す指標にはならないことを十分に認識する必要がある。第二に、日本語教育に関して言えば、日本語教育担当者が、留学生の生活指導相談という観点から、非常に重要な意味をもつ位置に置かれていること（倉地 1990）に鑑みれば、日本語教師養成の場では、日本語の知識や、日本語をどう教えるか、外国と日本の生活習慣や行動様式がどう違うかと言ったことだけではなく、異文化状況におかれた学習者に臆せず対応できる能力（学習援助者能力）を育成しなければならないという意識改革が、日本語教員養成を担う担当者側に不可欠である。第三は、現行のように、同じ業務に携わっている担当者（例えば留学生専門担当教員同士、センター教員同士、あるいは日本語教員同士など）が全国で頻繁に集会を開き、その内部で不満を訴え合い、発散するに留まっているだけでは、何ら根本的な問題解決には至らない。

専門教育の教員も含めた部署や、立場の異なる大学人に向かって要望や意見を積極的にアピールできる場を拓き、留学生担当者と専門教育担当者の間にあると言われる深い溝や、あるいは日本語指導部門の担当者と生活指導部門の担当者の断絶や確執を乗り越え、有機的な受け入れ協力体制を樹立することが肝要である。学内の様々な部署で留学生教育に関わっている立場、職務内容の違う教員間の間に存在する様々なコミュニケーション・ギャップを克服することこそが、多文化共生時代の大学教員に求められる「内なる異文化」の超克（倉地 近刊）にも繋がる大きな課題である。そのような「内なる異文化」を乗り越えてこそ、「外なる異文化」の受け入れが、初めて真に実り多きものとなるに違いない。

【注】

- 1) 留学生の機関保証及び、身元保証人制度の廃止に関しては、日本国際教育協会編『留学交流 特集 留学生の保証人について－機関保証への取組を中心に－』7巻9号、ぎょうせい、1995年や栖原暁『アジア人留学生の壁』日本放送協会出版部、1996年がある。

【参考文献】

- 稲村 博 1982 「留学生の問題：日本への留学生について」『社会精神医学』7, 31-37
- 異文化間教育学会 1991 『異文化間教育 5：在日留学生と異文化接触』アカデミア出版会
- 岩男寿美子・萩原滋 1977 「在日留学生の対日イメージ」『慶応義塾大学新聞研究所年報』1-11, 慶応義塾大学新聞研究所
- 岩男寿美子・萩原滋 1987 『留学生がみた日本：10年の魅力と批判』サイマル出版会
- 岩男寿美子・萩原滋 1988 『日本で学ぶ留学生：社会心理学の分析』勁草書房
- 馬越 徹 1993 「日本の留学生受け入れ政策に関する問題点」江淵一公『留学生受け入れのシステム及びアフターケアに関する総合的比較研究』平成3・4年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、215-228
- 江淵一公編 1990 「留学生受け入れと大学の国際化：全大学における留学生受け入れと教育に関

- する調査報告』『高等教育研究叢書』1, 広島大学大学教育研究センター
倉地曉美 近刊 『異文化間教育の革新』勁草書房
- 倉地曉美 1997 a 「大学におけるカウンセリングと教育との融合：大学教員と外国人留学生との
関わり」『大学論集』第26集, 広島大学大学教育研究センター, 131-148
- 倉地曉美 1997 b 「大学における多文化間教育としての日本語・日本事情教育」『広島大学日本語
教育学科紀要』7, 51-62
- 倉地曉美 1996 「大学における学習援助者の育成：ジャーナル・サポート・ネットワークの構築
に向けて」『大学論集』第25集, 広島大学大学教育研究センター, 129-144
- 倉地曉美 1995 「外国人との日本語によるコミュニケーション」『異文化接触の心理学』川島書店,
108-120
- 倉地曉美 1992 『対話からの異文化理解』勁草書房
- 倉地曉美 1990 「学習者の『異文化』についての一考察：日本語・日本事情の場合」『日本語教育』
71, 158-170
- 権藤与志夫編 1991 『世界の留学：現状と課題』東信堂
- 佐野秀樹 1992 「留学生のカウンセリング」『現代のエスプリ 現代学生へのアプローチ』294,
71-84, 至文堂
- 鈴木康明・堀洋道・井上孝代 1995 「異文化間カウンセリングにおけるカウンセラーの役割
に関する研究：外国人留学生を対象とする事例から」『教育相談研究』33, 17-24, 筑波大学
- 栖原 曉 1996 『アジア人留学生の壁』日本放送協会出版部
- 日本経済新聞社 1997 『2020年からの警鐘②：怠慢な日本人』
- 日本国際教育協会編 1995 「留学交流：特集 留学生の保証人について：機関保証への取組を中
心に」Vol. 7, No. 9, ぎょうせい
- Kurachi, A. 1995 Intercultural Education of Foreign Students: A Case Study of Attitude Change.
The Paper of Japanese Language Education & Japanese Studies, Society of Japanese
Language Education, Hong Kong, 59-76.

Foreign Student Advising: Current Issues and Future Directions for University Faculty

Akemi KURACHI*

Discussion about foreign student advising in Japanese universities has mostly been concerned with the establishment and organization of the systems of services for foreign students in the universities: it has neglected discussion of how well the system has functioned.

One of the reasons this system malfunctions is due to the lack of communication or meaningful conversation between and among the faculty who work with foreign students in the different sections in a university, that is faculty who are affiliated with the foreign students' education section as well as the academics who are mainly engaged in professional education in the different academic fields in the university.

Using three case studies of foreign student advising the author in this paper outlines the possibilities and limitations of both academic faculty and faculty specializing in the education of foreign students specifically. These faculty include foreign students advisors, counselors, and teachers of Japanese as a second language. In addition, the author raises the issue of advising foreign students from a new perspective and proposes a way of solving some of the problems in this area and pointing toward future directions.

Three cases are used to exemplify the differences in the relationship between foreign students and faculty in the context of foreign student advising.

In the first two cases, this author was acting as a member of the foreign student education faculty; in the third case, the author interacted with a student as an academic faculty member. Reactions of the students varied depending on my faculty role, even though I tried to take the same approach to the students in all three cases.

Compared to the first two cases, the third case indicates the extreme difficulty of intervening in a student's crisis management. A foreign student who seeks a degree or admission to graduate school often feels very threatened by the academic faculty who assess and evaluate his or her academic competency. A student's academic evaluation is very significant for foreign students' academic futures. Foreign students consequently find it very difficult with to seek help academic faculty when they are faced difficulties.

In foreign student advising there is no doubt that all the faculty must be accessible to their foreign students on campus so that both academic faculty and foreign student faculty need to supplement with each others' possibility and limitation due to their vocational role limitation,

* Associate Professor, Faculty of Education, Hiroshima University

and should cooperate with each other. At the same time, it is also significant for them (both academic faculty and foreign student faculty) to educate both domestic and foreign students, so that all the students (both domestic and foreign students) will also be able to function as the transcultural mediators. While academic faculty are more accessible to domestic students, foreign students' educators (including Japanese language teachers and faculty in foreign students' education centers) are more accessible to foreign students. Thus each type of faculty member has to utilize more fully their advantages when educating any students assigned to them, and to expect that each faculty member, regardless of type perform their role to the best of their ability.

The author sees the following points are important as of utmost importance in order to improve the quality of foreign student advising.

- (1) Personnel for the foreign students service section must be reconsidered. Simply hiring young, uninterested and untrained graduate school graduates will not provide professional staff.
- (2) In the field of Teaching Japanese as a Second Language, the professionals must realize the importance of developing their trainees' competency as transcultural mediators, and emphasize the nurturance of competency in teacher training as well as in-service education.
- (3) Open discussion by all faculty across different sections in an university must be held. Especially the communication gap between and among the faculty across sections must be established or restored in order to realize meaningful understanding and exchanges in transcultural education.